

## アーネスト・サトウが編集した 『セーリスの日本渡航記』の話

奥 正敬

### ■はじめに

アーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason SATOW, 1843-1929) の名前を聞き、さらに綴りを確認すると、日本人、あるいは日系の人ではないのかと思ってしまうかもしれません。しかし、彼はスウェーデン人を父に持つイギリス人で、江戸時代末期に来日して明治中期に日本駐劄英国全権公使 (現在の大使に相当) を務めた人物です。

公務の傍ら日本文化の研究で多くの成果を挙げ、ウィリアム・アストンやバジル・ホール・チェンバレンと共に、近代日本研究の祖とされています。同時に和本を中心としたコレクションを築き、イギリスや日本に後進のための研究拠点を作り上げました。

ここでは、外交官として日英関係の黎明期の記録を甦らせた刊行物をご紹介します。

### ■幕末日本への赴任

サトウは、日本では天保十四年にあたる1843年にロンドンで生まれました。ユニヴァーシティ・カレッジ在学中にイギリス外務省の通訳生試験に合格して、学位取得後、赴任地の日本へ向かいました。日本については1858 (安政五) 年に日英通商条約の締結に訪れたジェイムズ・エルギン卿の記録を読んで関心を高めたようで、まさに夢がかなった心持ちだったのではないのでしょうか。

彼は途中、上海と北京に滞在して1862 (文久二) 年9月8日に横浜へ到着しました。そして、居留地にあったイギリス公使館でニール代理公

使のもと、通訳生として勤務を始めたのでした。

特に着任早々に勃発した生麦事件をはじめ、江戸に移された公使館への度重なる焼き討ちや襲撃事件の処理など、重要な折衝に加わっています。また、生麦事件の賠償問題に端を発した薩英戦争と長州藩の外国艦船への砲撃から発展した下関戦争において、イギリス海軍要人の通訳を経験したことなどで、江戸時代末期の日本国内の動きを熟知していくこととなります。さらに、1865 (慶応元) 年、日本語通訳官に昇進すると、パークス公使と徳川慶喜や西郷隆盛など幕末の重要人物との個別会談にも同席し、人脈を広げています。

戊辰戦争に突入すると、諸外国はイギリスのパークス公使の提案で中立の立場を守り、やがて日本は安定を取り戻します。明治政府は矢継ぎ早に新制度を打ち出し、転々と移動したイギリス公使館も半蔵門外に作られ、新たな外交活動の拠点となります。

サトウも個人的には1871 (明治四) 年頃に日本人女性の武田兼<sup>かね</sup>と結婚し、公使館では書記官に昇格して業務面での活躍を続けます。

公使館の業務が落ち着きを見せると、サトウの日本研究も鋭さを見せ始めます。日本語会話や英和口語辞書など語学書、歴史書の英語翻訳書などの刊行から始まり、宗教、地理、考古学、旅行記などの出版に及んでいきます。特に、1872 (明治五) 年に日本アジア協会が設立されると、彼もその論叢へ精力的に論文を発表するようになりました。

こうしたサトウでしたが、1883 (明治十六)